

音響ドラマ制作サークル おにぎりワゴン

## 「LAST desire ーラスト・ディザイアー」第十一話

### 登場キャラクター一覧

- ・ 神崎 正斗
- ・ 久留巳 勇希
- ・ 中ッ原 翔太
- ・ 中ッ原 巴
- ・ ナビイ||α
- ・ ナビイ||β
- ・ 司

真っ白にどこまでも広がる空間。

翔太、狂ったように銃を乱射させている。

正斗、それをなんとか避けながら移動している。

翔太 「っ！ っ！ 死ね！ 死ね！ 死ね！ 死ねえ！」

(無我夢中に銃を乱射)

正斗 「っ！ っ！ っ！ はあっはあっ」(走りながら避けている)

正斗M 「前とは違って、攻撃が荒い。彼の動きを見てなんとかよけることができてるけど……なかなか近付けない。

これじゃ、こっちの攻撃も仕掛けられない。一体どうすれば」  
(心の声)

翔太 「ああああ！」(乱射している)

正斗 「っ！」

正斗M 「弾が勇希さんのほうに！」(心の声)

正斗 「勇希さん！」

勇希 「……え？」(その場で立ちつくしていたため、反応が遅れる)

正斗 「くそ！ っ！」(勇希のところへ駆け出す)

正斗M 「間に合え！ 間に合え！」(心の声)

正斗、思い切り踏みこむ。そして蹴り出す。

正斗 「はああ！」（思い切り蹴り出す）

正斗、勇希の前に立ち、庇う。弾をうける。

正斗 「ぐっ！ ぐあ！」（数弾当たる）

勇希 「っ……正斗……！」

正斗 「っはあ……よかった間に合った……」

勇希 「どうして、私なんかを……」

正斗 「その質問、勇希さんらしくないよ。僕たちは、二人でチーム、でしょ？」

勇希 「っ……」

勇希、自分の言葉を思い出す

※以下、三話からの抜粋／収録不要※

勇希 「諦めんじゃねえぞ。男見せろ。私たちは、二人でチームだ」

※以上、三話からの抜粋／収録不要※

勇希 「……」（あの時の自信がなく、黙る）

正斗 「勇希さん？」

翔太、二人に向かって撃つ。

正斗 「っ！」（気づく）

正斗、勇希の抱き、倒れ「むぎっ」に避ける。

正斗 「くっ！ 大丈夫！？」

勇希 「あ、ああ」

**正斗、立ち上がり、木刀を構える**

正斗M 「さっきまで乱暴に攻撃をしていたけど、その動きが止まった……。

仕掛けるなら今か」(心の声)

正斗 「(深呼吸) ……。はあああ！」

**正斗、走って翔太へと向かい、木刀を振りかざす**

翔太 「……」(よけようとしなさい)

正斗 「っ！」(よけようとしなさいことに気づく)

正斗M 「よけようとしていない。なら、遠慮なく！」(心の声)

正斗 「はあっ！」(振りおろす)

翔太 「っ！」(二丁の銃の銃剣で正斗の木刀を止める)

正斗 「っ！」

正斗M 「銃剣で止められた！ でもこの状態だと、撃つことはできないはず！」  
(心の声)

**正斗、攻撃の手をやめず、何度も翔太に攻撃をする。**

正斗 「はっ！ はあ！ っ！」（何度も攻撃をする）

しかし、全て銃剣で防がれる。

正斗M 「くそ！ 全部防がれる！ 近距離戦にも慣れてるのか！」（心の声）

翔太 「っ！」（正斗を蹴る）

正斗 「ぐあー！」（蹴られ、声が漏れる）

**正斗、蹴られて体勢を崩す。なんとか倒れないように踏ん張る**

正斗 「くっ……」（倒れないように耐えた）

翔太 「っ！ っ！」（何度も正斗を蹴る）

正斗 「ぐっ！ ぐあー！ ああ！」（全てよけることが出来ず、くらう）

**正斗、蹴り飛ばされ、倒れる**

正斗 「ぐっ……はあっはあっ……」

翔太 「……」

正斗 「……」（再び立ち上がる）

翔太 「……。無駄ですよ。あなたは、僕に勝つことはできない」

正斗 「やってみなくちゃ、わからないだろ」

翔太 「……」

正斗 「はああああ！」（攻撃を仕掛ける）

翔太 「……」

正斗 「はぁあっ！」（木刀を振りかぶる）

翔太 「はぁっ！」（銃剣で思い切り木刀を弾く）

### 翔太の銃剣により、木刀が折られる

正斗 「っ！」（折られた事に驚く）

### 折れた木刀が床に落ち、転がる

正斗 「……木刀が」

勇希 「……折られた……」

翔太 「……ほら、だから言ったでしょ。無駄だって」

正斗 「……。……はぁっ！」（素手で攻撃を仕掛ける）

翔太 「っ！」（かろうじてよける）

正斗 「くそ！」

翔太 「……もう武器もない状況で、勝ち目はないというのに」

正斗 「僕は、勝たなくちゃいけないんだ」

翔太 「……あなたには、なんの願いも欲望もないんですよ？」

正斗 「……。勇希さんの願いを叶えるって、約束したから」

翔太 「……は？」

正斗 「勇希さんの記憶を取り戻す。ゲームの賞品としてもらえるなんてまだ信じられないけど、彼女がそう信じる限り、僕は戦う」

勇希 「っ……」

翔太 「記憶……？ はは、ははは！ あははは！ あーなんて滑稽なんだ！

本当に、あなたは何も知らない。……そんな無知なあなたに教えてあげますよ」

勇希 「っ、……やめろ、やめてくれ」

翔太 「そこにいる久留巳勇希は人間ではありません。」

人間に似せて造られたまがい物なんですよ」

正斗 「……。何を、言ってるんだ……。」

人間じゃないって、ふざけたことを言うな！」

翔太 「ははは！ 後ろにいる本人を見ても、そう言えますか？」

勇希 「……」

正斗 「……。人間じゃないなんてさ、……ホント嘘にしたってひどすぎるよね」

勇希 「……。アイツの言うとおりで。私は、人間じゃない」

正斗 「っ！……は、はは、もう、やめてよ勇希さんまで。」

そんな冗談、面白くないよ……」

勇希 「冗談なんかじゃねえよ。私は、ナビイたちに作られたニセモンだ。」

人間を作ってみたっていう、ただそんだけの理由で作られた。」

いろんな世界線でこのゲームをするたびに、作りかえられてるんだってよ」

正斗 「ちよっと、待って。ナビイって、あれはこのゲームのキャラクターだろ？」

それがどうして、人間を……作る……？ 世界線？ 何を言ってるの？」

勇希 「私だってわかんねえよ！ でも、人間があんな風に歪んだりしねえだろ？」

目の前で急に消えたりしねえだろ！？」

正斗 「……」

勇希 「私は、……このゲームが始まると同時に、作り変えられた。」

はじめっから、記憶なんて、なかったんだ。」

現実の世界には、もう戻れない。……このゲームが終わったら、

また、前と同じように空っぽにされる。」

私っていうもんは、いなくなっちゃう……」

正斗 「……嘘だ」

勇希 「嘘じゃねえよ」

正斗 「嘘だ！」

勇希 「嘘じゃねえつつつてんだろっ！」

正斗 「っ…………！」

**正斗、勇希の言葉を思い出す**

**※以下、二話からの抜粋／収録不要※**

勇希 「ん？ ああ、私このゲームにログインするまでの記憶がねえんだよ」

**※以上、二話からの抜粋／収録不要※**

**※以下、三話からの抜粋／収録不要※**

勇希 「ああ！ そっちか！ んん普通に過ごしてたら記憶も戻ってくるだろ」

**※以上、三話からの抜粋／収録不要※**

**※以下、七話からの抜粋／収録不要※**

勇希 「私は、自分の記憶の為に優勝したい！

そのためにはお前には真剣に戦ってもらわなきゃならねえ！

なら、正斗が私のために戦えばいい！ 以上！」

**※以上、七話からの抜粋／収録不要※**

**同時にさっき自分が勇希に言った言葉も思い出す**

**※以下、十話からの抜粋／収録不要※**

正斗 「この戦いが終わったら、またうちにきて、ご飯食べようよ。

勇希さんの好きな物作ってあげるからさ」

**※以上、十話からの抜粋／収録不要※**

**※以下、十一話からの抜粋／収録不要※**



正斗 「勇希さんの記憶を取り戻す。ゲームの賞品としてもらえるとはまだ信じられないけど、彼女がそう信じる限り、僕は戦う」

※以上、十一話からの抜粋／収録不要※

正斗M 「そうだ。どうしても僕は今まで気づかなかったんだ。どうしてちゃんと、考えなかったんだ」(心の声)

正斗 「……」

翔太 「……真実って残酷ですよ？ 絶望したでしょ？ 何も信じられないでしょ？ ははは！ 本当に、滑稽だ！  
こんな空っぽなものを守って戦うなんて、バカらしく感じるでしょ！」

正斗 「……違う。勇希さんは空っぽなんかじゃない」

勇希 「っ」

翔太 「……」

正斗M 「彼女は強い人だと思ってた。明るくて、無鉄砲だけど芯が通ってて真っすぐで、迷いがなくて、そんな女の子だと思ってた。でも違った。彼女はゲームに頼ってただけなんだ。それしかなかったから。だから、真っすぐ前を向いていられただけなんだ。  
そのことに、今更になって気づくなんて……」(心の声)

正斗 「勇希さん、ごめんね」

勇希 「なんでお前が謝るんだよ。

……ずつと騙してた。お前に甘えて、ありもしねえものために戦わせようとした。こんな、人間でもない、やつのために……」

正斗 「甘えてたのは僕のほうだよ。

君の光があまりにも暖かくて、心地よかったんだ。

遠慮なく言いたい事を言ってくれる。背中を押してくれる。

自分で考えようとしなかった。全部、君に甘えてた」

勇希 「違う！ 私はただの考えなしだったただけだ！

そう、作られただけだ……」

正斗 「……君は君の意思で、僕といてくれた」

勇希 「……それも、そう作られただけかもしれない」

正斗 「それでも、僕は嬉しかった。君といて、楽しかった。

……君がいなくなって、心から願ったんだ。

君に会いたい、って」

勇希 「っ」

正斗 「作られたものでもいい。記憶がなくなたっていい。

僕は、君に会いたかった。今ここにいる、久留巳勇希さんに」

勇希 「……正、斗……」

正斗 「ごめんね。……もう、泣いていいんだよ」

勇希 「……。……う……う……う……」 (泣きだす)

**勇希、正斗に抱きつく。**

勇希 「私も、会いたかった。正斗に、すごくすごく、会いたかった……」

(泣きながら)

正斗 「うん、……うん」 (優しく)

**翔太、二人の様子を見て、後ずさり。**

翔太 「……どう、して……受け止められるんだ……。」

「そいつは人間じゃない！ ただの偽物だ！ なのに！ なんてだよ！」

正斗 「……偽物なんかじゃない。」

「僕にとって大切な……たったひとりの女の子だ」

翔太 「っ！ ……なんで、あなたはそうやって言えるんだ……。」

「こんな、こんなの……僕は、僕は！」

### 翔太、銃を構える

正斗 「っ！」

勇希 「っ！」

翔太 「はあああああっ！」（無我夢中に銃を乱射）

正斗M 「広範囲の攻撃！ よけられない！」（心の声）

正斗 「勇希さん！」（庇うように抱きしめる）

勇希 「っ！」

### 正斗、勇希を庇うように抱きしめ、攻撃を受ける

正斗 「ぐっ！ ぐああ！ くっ！」（何度も何度も攻撃を受ける）

勇希 「離せ！ このままだとお前が！」

正斗 「嫌だ、絶対に。ぐっ……今度は、僕が守るんだっ！」

勇希 「正斗……」

正斗が持っていた折れた木刀が光出す

翔太 「っ！ なんだ……！」

正斗 「……折れた木刀の……」

勇希 「形が、変わって……」

木刀、形状が刀のようなものに変化する。

正斗 「……これは、刀？」

勇希 「武器の形が変わったぞ……すごいな、おい！」

翔太 「……武器の形状が変わるだなんて……そんなこと今までなかったのに」

勇希 「すっげえ！ 木刀なんかより百倍かっこいい！ ひゃく！」

正斗 「……ふ、ふはは」

勇希 「あ？ どうした？」

正斗 「ううん。いつもの勇希さんだな、思ってた」

勇希 「こんなの興奮するに決まってるんだろ！」

正斗 「うん、そうだね。……これなら……戦える」

正斗、鞘から刀を抜く。

翔太 「っ！」(身構える)

正斗 「(深呼吸)」

正斗M 「武器から伝わってくる。どう戦えばいいのか(心の声)」

正斗 「いくよ。……はああっ！」(その場で、刀を振る)

翔太 「っ！」

**正斗、その場で刀を振る。その衝撃波が翔太のところにまで届く**

翔太 「なっ！ くっ！」（かろうじて避ける）

勇希 「な、なんだ今の！？ その場で刀振っただけなのに！」

翔太 「……今のは……」

正斗 「衝撃波みたいなもの、かな。

これなら、近づかなくても攻撃をすることができる」

翔太 「武器の変化で、攻撃方法も進化したということですか……。

はは……、ほんとあなたって人はつくづく……僕をイラつかせるッ！」

**翔太、再び銃を構え、数発正斗に向かって撃つ。**

正斗 「ふっ！ はあっ！」（銃弾をよけ、その場で刀を振る）

翔太 「ちっ！ 加速っ！」（よけられ舌打ちをし、高速移動する）

**翔太、正斗の後ろに回り込む**

翔太 「はあっ！」（後ろから正斗に向かって撃つ）

正斗 「っ！」（銃弾を刀で弾く）

翔太 「なっ！」（弾かれた事に驚く）

**翔太、瞬時に距離を取る**

翔太M 「さっきまでとは違う。動きに迷いが無い」（心の声）

正斗 「っ！」(走り出す)

翔太 「っ！ はっ！」(正斗の足元を撃つ)

正斗 「っ！ はあ！」(足を止め、思い切り踏みこみ翔太へと飛び込む)

翔太 「ははっ！ そんなに高く飛んだら、こちらのいい的ですよッ！」

(空中の正斗に銃を向け、撃つ)

正斗 「っ！ ぐっ！」(よけられず、攻撃を受ける)

**正斗、攻撃を受け、そのまま地面に着地する**

正斗 「くっ……はあ！」(着地し、その場で刀を振る)

翔太 「はっ！ 攻撃が単純ですね！」(鼻で笑い、よける)

正斗 「はああ！ はっ！ やあああ！」(何発も攻撃をする)

翔太 「ふっ！ は！」(全てをよける)

正斗 「っ！ はああああ！」(再び駆け出し、翔太に近づき、直接攻撃する)

翔太 「ふっ！ はあ！」(銃剣で受け止め、はねのける)

正斗 「っ！ はあ！ はあ！」(弾かれるも、攻撃の手をやめない)

翔太 「くっ！」

翔太M 「攻撃の威力とスピードがあがってきている！」(心の声)

正斗 「はああああ！」(思い切り、切りつける)

翔太 「ぐっ！ ぐあ！」(受け止めるも、吹き飛ばされる)

**翔太、吹き飛ばされるも、なんとか倒れずに着地する**

翔太 「くっ……。はぁ……。はぁ……」

正斗 「はぁっはぁっはぁっ……。」(息を整える)

**正斗と翔太、息を整える。そして再び正斗から仕掛ける**

正斗 「っ！」(かけ出す)

翔太 「っ！」(正斗に向かって撃つ)

正斗 「はっ！」(再び、高く跳ぶ)

翔太 「っ、またそんな高く……。さっきの二の舞ですよ！」

正斗 「はぁぁぁ！」(思い切り振りかぶる)

翔太 「くらえ！ グラビディー！」(勇希に遮られる)

勇希 「どこ見てんだよッ！」(翔太の台詞を遮る)

翔太 「っ！」(勇希の声に反応する)

勇希 「どりやぁぁ！」(翔太を思い切り蹴る)

翔太 「ぐぁぁぁ！」(思い切りくらい、吹き飛ばされる)

**翔太、勇希の蹴りを思い切りくらい、飛ばされて、倒れる**

翔太 「ぐっ……。」(倒れる衝撃)

勇希 「っしやぁ！ ヒットお！」

翔太 「……。今の連携……。一体いつ……」

勇希 「こんなの勘だ、勘！」

正斗 「……。お互いを信頼しているからこそ、できた連携だよ」

勇希 「私たちは、二人でチーム、だからな！」

翔太 「信頼……。そんなものに僕は！」(銃を構える)

正斗 「はっ！」(銃を刀で弾く)

翔太 「ぐ！」（2つの銃を弾かれる）

正斗、翔太の銃を弾く。翔太、それにより2つの銃から手を離してしまう  
銃は手の届かない位置に飛ばされる。そして、翔太に刀を突き付ける

正斗 「……（息を吐く）……やっと、捕まえた」

翔太 「……」

正斗 「……」

翔太 「……どうしたんです？ 攻撃しないんですか？」

正斗 「一体君は、何を知ってるんだ」

翔太 「答えるとでも？」

正斗 「……。君は自分のお姉さんを肉の塊だって言ってたよね」

翔太 「アレは僕の姉さんなんかじゃない」

正斗 「……なら、僕が彼女に何をしたって、平気なんだよね？」

正斗、少し先にいる巴に近づく。

勇希 「おい、正斗」

正斗 「勇希さんはそこにいて。大丈夫だから」

翔太 「……一体、何を……」

正斗、巴さんの目の前に立つ

巴 「……もういや……こんなの夢……あんなの翔太じゃない……」

（ひとりぞぶつぞぶつ呟いている）

正斗 「……」（刀を構える）



翔太 「……まさか」

正斗 「……巴さん」

巴 「え？」

正斗 「っ！」（大きく振りかぶる）

翔太 「っ！」

巴 「っ！」

**正斗、巴に向かって刀を振りかざす。**

翔太 「やめろおおおおっ！」

**巴に当たる直前、翔太の叫びが響き渡る。**

正斗 「……」（動きを止める）

翔太 「はあ……はあ……」

正斗 「……。肉の塊じゃなかったのか？」

翔太 「……そうだ……ソレの……姉さんじゃない……違う……違うのに……」  
（泣きそうになりながら）

巴 「……しよう、た……」

正斗 「……どうしてそんなに苦しそうに戦うの」

翔太 「……」

正斗 「君は何かを知ってる。そして、それに苦しんでる。

君の戦い方や言動は普通じゃない……正気を保てないほどの何かを  
抱えているからじゃないのか？」

翔太 「……」

正斗 「教えてほしい。一体このゲームはなんなんのか。

君が一体何に苦しんでいるのか。……僕は、君のことも、知りたいんだ。  
君の力にはなれないかもしれない。それでも、知ることにはできる。  
知ってから、ちゃんと戦いたい」

翔太 「っ」

### 翔太、司の言葉を思い出す

司 「知りたい。お前の苦しみが一体なんなのか。

力になれるなんて偉そうなことは言えねえけど、

お前を理解したい。理解して、一緒に戦っていききたいんだ」

翔太 「ぐっ……ああ！」（頭痛で、苦しむ）

正斗 「っ、翔太くん」（苦しみ出した翔太を心配する声）

翔太 「はあ……はあ……はあ……はあ……」（少しして落ち着く）

翔太M 「本当に……司さんと同じようなことを言う人だ」（心の声）

### 翔太、ゆっくりと立ち上がる

翔太 「……」（ゆっくりと立ち上がる）

正斗 「っ」（少し身構える）

勇希 「っ」（少し身構える）

翔太 「そう身構えないでください。戦う気が失せました。

……話を聞いたところで、あなたにはどうすることもできない。

それでも、聞きたいですか？」

正斗 「うん。知らなくちゃいけないんだ。……きつと」

翔太 「…わかりました。話します。…このゲームの本当のシステムを」

## 11・2 翔太の過去・回想／翔太の家

翔太の過去。元いた世界線での話。(間に入るモノローグは現在の翔太の声)

翔太の家。翔太、クラスメイトに髪に泥をつけられ、帰ってくる。

玄関が開く。その音を聞いて、巴が玄関にやってくる

巴 「翔太、おかえりなさい。学校どうだった？」

翔太 「…楽しかったよ」

巴 「は〜い、それ嘘！」

翔太 「うっ」

巴 「もう、お姉ちゃんに嘘ついたって無駄よ？」

翔太の事ならなんでもわかるんだから。

また、学校でいじめられたんでしょ？」(明るく)

翔太 「…僕の髪の色が…おかしいって。

真っ白で、気持ち悪い、って…」

巴 「うわっ、ホントな〜んもわかってない子たちね！こんなに綺麗なのに〜」

翔太 「…お姉ちゃん、僕の髪、見えないでしょ？」

巴 「ふんっ！」(翔太の頭を殴る)

翔太 「いだっ！」

巴 「お姉ちゃんを舐めないでちょうだい！

翔太の髪がすっごく綺麗なことくらい、見えなくなっただってわかるわ！」

翔太M 「僕の姉さんは、生まれつき目が悪く、ほとんど視力がなかった。

でも、明るくてやさしくて、いつも僕を元気づけてくれた」

11・3 翔太の過去／翔太の部屋

翔太、部屋でパソコンを使ってネットサーフィンをしている

翔太M 「ある日、ゲーム会社M O Oの新作ゲームの

テストプレイヤーを募集している記事を見つけた。

優勝したら豪華賞品がもらえると、書いてあった」

(モノローグ)

翔太 「……豪華賞品……。お姉ちゃんに、何かプレゼントができるかも……」

翔太M 「そんな軽い気持ちで、エントリーした」(モノローグ)

11・4 翔太の過去／ラスト・デザイン内

$\alpha$ からゲームの説明を受ける翔太。優勝賞品のことを聞かされる

翔太 「え、なんでも……って、どういうこと？」

$\alpha$  「なんでもはなんでもさ！ ほしいと願うもの、なんでもひとつ手に入る！

たとえばさうだねっ。君のお姉さんの視力、とか！」

翔太 「それ、ほんとう！？」

$\alpha$  「M O O社は信用第一！ 『不可能は技術で可能にするものである！』

京也くんの言葉引用！」

翔太 「……お姉ちゃんの目が……治る……！」

翔太M 「姉さんの目を治すことができるかもしれない。

姉さんにこの世界を見せてあげられるかもしれない。  
 そしたら、姉さんが綺麗だと言ってくれた僕の髪を見せることができる。  
 僕は、無我夢中で戦った」(モノローグ)

### 11・5 ラスト・デザイナー内・学校のグラウンド・最終バトル

翔太のチーム、最終バトルに勝利する相手チームの足枷が砕ける音がある。

α 「勝者！ 中ッ原チーム！ おめでと〜〜〜！」

翔太 「はあ…はあ…：勝った…：勝ったんだ…：！ これです！」

α 「優勝した中ッ原チームには、欲しいものをお渡しいたしま〜す！」

β 「ログアウトしたら、すぐに手に入れることが、できます。

最初、は、少し戸惑うかもしれませんが、が、頑張ってください」

翔太M 「この時、僕はまだわかっていなかった。ナビイが何に戸惑うと言って、

何に対して頑張れという言葉を使ったのか。けれど、すぐに知ることになる」  
 (モノローグ)

α 「つてことで！ このたびは、M O O 新作ゲーム『ラスト・デザイナー』の

テストプレイにご協力くださり、ありがとうございます〜！」

β 「今後とも、M O O 社をよろしくお願い、いたします」

α 「それじゃ！」

β 「さようなら」

フツツと回線が切れる音。

翔太、部屋でゆっくり目が覚める。ベッドに寝ている体勢。

翔太 「ん……はあ……」(ログアウトが終わる)

翔太 M 「戻ってきた……。はあ……僕、勝ったんだ……。

これで……。っ、お姉ちゃん！」

翔太、ベッドから跳ね起き、巴の部屋に向かって走る

翔太 M 「僕は勝ったんだ！ これで！ お姉ちゃんの目が治る！

お姉ちゃんに、ちゃんと僕を見てもらえるんだ！」(心の声)

翔太、巴の部屋のドアを思い切り開ける

翔太 「お姉ちゃん！」

巴 「ん。……翔太？」(少し不機嫌に)

翔太 「ねえ、僕のこと見える？ ちゃんと、見えてる！？」

巴 「は？ 普通に見えるけど」

翔太 「っ！」

翔太 M 「……本当に叶ったんだ」(心の声)

翔太 「よかった……よかった……」(泣きそうになりながら)

巴 「え、うそ。何泣きそうになってんの。気持ち悪い」(嫌悪感たっぷり)

翔太 「……え？」

巴 「つか、勝手に入ってくんなくていつも言ってるでしょ？」

それに、何？『お姉ちゃん』って。アンタいつも呼び捨てじゃん。

あ、もしかしてまた金貸してくれて話？ いい加減にしてよホント」

翔太 「……な、なに言ってるの？ お姉ちゃん」

巴 「あくもう！ だからそれキモイって言ってるでしょ！？」

早く出てってよ。あんたのその髪、見るだけでゾワゾワすんのよね」

翔太 「……え。どうして、そんな……いつも、綺麗って、言ってくれてたでしょ？」

巴 「はあ？ どこか綺麗なのよ。白髪みたくで気持ち悪いっつーの」

翔太 「っ！」

翔太 M 「ここでやっと気がついた。この姉さんは、僕の姉さんじゃない。

全くの別人だということに」(モノローグ)

翔太 M 「すぐにM O Oに問い合わせた。けれど全く相手にされなかった」

翔太 「どうして……こんなことに……僕の姉さんはどこにいったの？

ここは、一体……どこなんだよ……！」

(戸惑い、怒りと悲しみが入り混じった声)

翔太 M 「ある日一通のメールが届いた。

それは、M O Oの新作ゲームのテストプレイの招待メールだった。

僕は迷わず、エントリーした」(モノローグ)

翔太のチーム、最終バトルに勝利する相手チームの足枷が砕ける音がする。

α 「勝者！ 中ッ原チーム！ おめでと〜〜〜！」

翔太 「はあっ……はあっ！」

α 「優勝した中ッ原チームには、欲しいものをお渡しいたします！」

β 「ログアウトしたら、すぐに手に入れることが、できます。

最初、は、少し戸惑うかもしれませんが、が、頑張ってください！」

翔太 「ちよっと待って！」

α 「うん？ どうしたの？ ショウタ」

翔太 「聞きたい事があります。僕は、前回もこのゲームに参加した。

そして優勝し、姉の目が見えるようになることを願った。

姉さんは確かに、目が見えていた。けれど、まるで別人だった。

一体、どうなってるんですか！」

α 「どうしてそんなに怒ってるの？」

β 「ちゃんと、目が見えるお姉さんのところに、いったのに」

翔太 「あれは僕の姉さんじゃない！」

α 「何ががうの？ 名前も見た目も同じでしょ？」

君の願いは『目に見える姉がいる世界』。そこに移動させたまでさ」

翔太 「っ！ 世界？ 移動？ どういうことですか」

α 『世界線』って知ってるっ？」

翔太 「世界線……？」

β 「別の言葉に置き換えると、パラレルワールド」

α 「この世にはね、平行している世界が無数に存在するんだ」

β 「どの世界にも、同じ人間が存在している」



α 「けれど、微妙な違いがある。たとえば、Aという世界では十歳で病死した人が」  
β 「Bという世界では、八十歳まで生きていたり」  
α 「Aという世界では温厚な性格の人が」  
β 「Bという世界では、気性が激しい性格だったり」  
翔太 「っ……もしかして」  
α 「そう！ 僕たちは君たちが願うモノが存在する他の世界に  
魂だけを入れ替えてあげてるんだよ！」  
翔太 「魂を……入れ替えている？ そ、そんなことできるわけない！」  
β 「自分で見て、感じたでしょ？ ……ここが別の世界だってことを」  
翔太 「っ……」  
α 「僕たちには生まれながら色んな力が与えられていたんだ」  
β 「そのひとつが、世界線を自由に行き来できる力」  
α 「そして、人の魂を入れ替えることができる力！」  
翔太 「……じゃあ、ここは本当に、僕がいた世界じゃ、ないってことなんだね……。  
お願いだ！ 僕を元の世界に戻して！  
優勝したら願いを叶えてくれるんだろ！？ だったら！」  
α 「あーごめん。それは無理なんだ」  
β 「君が元いた世界線がどこか、忘れちゃったからね」  
翔太 「っ！ そ、そんな……」  
α 「でも安心して！ 君の中のお姉さんの性格に限りなく似た人がいるところに  
飛ばしてあげる！」  
翔太 「……違う……そんなの……それじゃだめなんだ……僕は」  
α 「それじゃ！」  
β 「さようなら」  
翔太 「っ！ 待って！」

翔太M

「そしてまた、僕は別の世界へと飛ばされた。

僕は絶望した。もう、姉さんには会えないと。

無数にある世界線から、姉さんのいる世界を引き当てることなんて不可能だと。

けど、諦められなかった。

無謀だとわかっていた。不可能だとわかっていた。それでも」

翔太

「何十回、何百回かかったってかまわない。

何度でもゲームに参加して、勝ってやる。

姉さんの居る世界に戻るんだ……絶対に！」

翔太M

「僕は、戦い続ける覚悟を決めた」(モノローグ)